

せん妄と認知症の関係～当院でのせん妄予防の取り組み～

南博也

(大阪医科薬科大学病院 精神神経科)

せん妄と認知症は精神科領域のみならず内科や外科領域においても頻りに遭遇する common disease である。認知症は原則として一度発症するとその後の認知機能低下は不可逆的な経過を辿り、その発症のリスクファクターとなる高血圧症や糖尿病といった疾患の管理が重要である。ここで、従来せん妄は一過性で可逆的な意識障害とされていたが、近年の研究によりせん妄自体が認知症発症の独立した危険因子であり、さらに既存の認知症の進行を加速させることが明らかになりつつある。我々が過去に行った当院のカルテデータを用いた約 26 万人の入院患者を対象とした後方視的観察研究においても、せん妄は認知症発症のハザード比を 5.29(95% CI 1.35-20.75)まで高めることが示された。当院ではこれまで精神科が主体となって日々のリエゾン業務において他科からのコンサルテーションに応じる形でせん妄治療に従事していたが、さらなるせん妄予防の観点から、2020 年 10 月より全診療科共通の「不眠時指示フローチャート」が導入された。医療安全推進室が主体となり整備されたこの睡眠障害への早期介入体制により、それまで院内でも多く使用されていたベンゾジアゾピン系薬物やその類縁化合物の使用割合は減少し、ラメルテオンやスボレキサント、レンボレキサントといった新規睡眠導入剤の使用割合が増加した。これにより 2016 年 1 月～2024 年 12 月の期間に入院した約 20 万人の患者を対象とした後方視的観察研究においても、2020 年 10 月を境目として院内で発生するせん妄の発症数は有意に減少したことが示された($p < 0.001$)。せん妄対策の主戦場は「発症後の治療」から「発症前の予防」へとシフトすべきという考えが広く知られるようになってきており、当院におけるせん妄予防と対策に関して報告する。なお前述する両研究は当院倫理委員会での審査を経て実施されたものである。